

メルボルン大学先住民担当理事一行の再訪

7月22日（月）から31日（水）の間、本学の戦略的国際パートナー校である豪州メルボルン大学の先住民担当 Deputy Vice-Chancellor（理事相当）一行が本学を再訪しました。

バリー・ジャッド理事、アーロン・コーン先住民知識研究所長、マーゴ・イーデン先住民戦略部長、カースティン・クラーク副部長、リチャード・チェンホール医学・歯学・保健科学研究教授／ヘルスエクイティセンター長、クリステン・スミス同研究院准教授は、一行としては昨年6月に続く2度目の来札となり、また、同大学先住民知識研究所の職員であるタルニーン・カローベ、キルヤニ・カローベ両氏、同大学教養学院博士課程学生のルビー・バナティン氏が帯同しました。なお、ジャッド理事、コーン所長、チェンホール教授は、本学国際連携研究教育局（GI-CoRE）先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）の招へい教員になっています。

一行はGSIの長であるアイヌ・先住民研究センターの加藤博文教授が開催する北海道サマーインスティテュートの「アイヌ・先住民研究入門Ⅱ：アイヌ文化遺産と文化的景観」の見学を行い、札幌市アイヌ文化交流センターを訪問、ハイブリッド開催したパネルディスカッションを通し、参加学生たちにメルボルン大学の先住民コミュニティ連携活動の紹介を行いました。

寶金清博総長、山口淳二理事・副学長（ダイバーシティ・インクルージョン担当）、瀬戸口剛理事・副学長（研究担当）、山本文彦理事・副学長（アイヌ共生推進本部担当）、加藤教授、山内太郎環境健康科学研究教育センター長との会談は、両校のこの3年間の連携を振り返る機会となり、ジャッド理事

から「これまで、豪州にとっての先住民研究の国際連携といえばカナダやハワイだったが、北海道や台湾との連携を通し、環太平洋で先住民コミュニティ、研究者ネットワークを繋ぐことができる。北大との連携はメルボルン大学にとって得難いものであり、アイヌとアボリジニの若い世代と社会を繋ぐ両校の役目は大きい」との話がありました。メルボルン大学の先住民出身教職員・学生の数値目標に向けて、学士課程から博士課程まで入学要件の緩和を行っていること、出足が遅かったものの今や先住民担当執行部と研究所を備え、マネジメントの点で他の豪州の大学をリードする存在となっていること、大学が所有する先住民資料を集約し先住民コミュニティがアクセスしやすいようにする場所を開設予定であること、米国ハーバード大学が奴隷史への認識を示したことを参考に、「A History of Indigenous Australia and the University of Melbourne（先住民のオーストラリアとメルボルン大学の歴史）」という自省本の発行に至ったこと等、先住民案件への同学のコミットメントが共有されました。

両大学の先住民研究者たちは、2024年10月にメルボルン大学で開催されるグローバルヘルスに係るワークショップで再会するほか、2025年に北海道で開催される国際先住民フォーラムに際し、北海道と豪州双方の先住民コミュニティとの連携を含めた、集中共同教育プログラムを計画しています。先住民研究という両校の特色ある研究分野について、官学コミュニティによる交流の深化が期待されます。

（国際連携研究教育局、アイヌ・先住民研究センター、国際連携推進本部）



本学執行部と来訪者一行



左から加藤教授、瀬戸口理事・副学長、寶金総長、山口理事・副学長



左からジャッド理事、イーデン部長、コーン所長



会談の様子